

博士論文の要約(公表用)

論文題目

『縁起説にもとづくチャンドラキールティの修道論—『六十頌如理論注』(Yuktiṣaṣṭikāvṛtti)を中心として—』

氏名

劉 暢

印



中観派及び縁起論者 (pratītyasamutpādvādin) を自認するチャンドラキールティ (Candrakīrti, c. 600–650) は、前代の中観思想系の諸論師が言及しなかった複数の中観論書に注目し、中観派に新たな思想的リソースを加えるが、声聞もまた空性や法無我 (dharmanairātmya) を一定程度理解しうることを認め、声聞に関するアビダルマ教学の修道論上の必要性をも指摘した。声聞に関するこのような理解をもって、仏教内外の思想を批判したチャンドラキールティは、インド仏教思想史においてきわめて重要な位置を占める論師の一人であると考えられる。彼の著作の中で、とくに声聞の教説をめぐって展開する論書は『六十頌如理論注』(Yuktiṣaṣṭikāvṛtti, YSV) である。同論は主に伝統的教説をもとに、有見 (*astidrṣṭi) を排斥する正理 (yukti) を説くとともに、縁起にもとづく修道論を詳説する。また、YSV はチャンドラキールティの著作の中で前伝期 (snga dar) にチベット語に翻訳された唯一の作品である点も注目される。

従来の研究はおもにチャンドラキールティの大乗的修道論を重視しているが、本研究は YSV を主要な対象とし、YS と YSV それぞれの縁起思想と修道論を解明すること、並びにチャンドラキールティがいかに伝統的教説を批判的に摂取しながら、声聞に関する中観派の修道論を構築するかということの解明を主要な目的とする。

本論文の第一部は本論に相当する研究篇である。第一部の第一章においては、デプン寺写本、北京版等の蔵経本、敦煌本の偈頌訳 (YS)、及び YSV に見える偈文に基づいて YS チベット語訳の諸本の関係を分析して、前伝期と後伝期のチベット語訳を比較考察し、後伝期における改訂の意図を推定した。また、修道論に焦点を絞り、YS の構成を再考して、論全体の文脈上の関連を改めて明らかにした。さらに、YS における縁起説に関する表現を精査し、YS における遍知の用例と特徴に対しても考察を行った。第二章 YSV における修道論の体系の研究において、まず YSV に見る YS 帰敬偈に対する注釈内容に対して考察を加えた。そしてまた、YSV における縁起に基づく生滅の道と、不生である本質 (svabhāva 自性) を完全に知る (=遍知, pariñāna) 道とを考察して、チャンドラキールティによる遍知に対する理解を分析した。第三章アビダルマ教学に対する受容と批判についての研究において、YSV におけるアビダルマ教学の修道論上の位置づけを指摘して、YSV における五蘊等に関する説明に焦点を絞って、世人と声聞の人が声聞に従う伝統的教説を手段にして真実に入る方法を考察した。また、チャンドラキールティがいかにして四聖諦と八聖語等の伝統教説を批判的に受容し、中観派の立場から二諦を設定したかを考察した。第四章伝統經典の援用と空性説をめぐる YSV

と PsP 第十三章の比較考察において、YSV と PsP 第 13 章における経典の援用とその特徴を分析して、YSV と PsP 第 13 章における空性に対する重要な説明を分析した。

第二部は関連テキストの校訂および現代語訳である。その中で、デブン寺写本等によって校訂した YS チベット語訳テキスト、YS の和訳、サンスクリット文による YS の索引、YSV のチベット語訳校訂テキストと和訳、六つの写本によって校訂した『プラサンナパダー』(*Prasannapadā*) 第十三章のサンスクリットテキスト、同章のチベット訳校訂本と和訳を提示した。